# 住井すゑとその文学の里（六十四）

## ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員
栗原（くりはら） 功（いさお）

寄稿

## 橋のない川に橋を架けよう

### ー住井すゑ先生との思い出が走馬灯のようにー

中根房子（つくば市在住）

今年も住井先生宅のお庭の「孝行桜」は見事に満開に咲いたことでしょう。病気がちで伏せっていることの多い父親（犬田卯）に寝ながらでも花見ができるようにと次男の充さんが3本の桜の苗木を植えた話はあまりにも有名です。私もその桜の花の満開に何度か遭遇しました。小さかった苗木も年を経て大木になり、その花々は天空を覆いつくし、あたりを幽玄の世界へ誘うかのようでした。

当時は、近所のお年寄りたちを招待して花見を楽しんだともお聞きしましたが、それぞれに年を取り時間の経過と共に歴史の彼方の思い出になってしまいました。

住井先生が逝かれて早や14年。その間も抱撲舎を訪れるファンが絶えません。訪問者の方々の中には差別に深い見識を持ち、また差別という社会現象に興味を抱いた方などさまざまな方が学びにいらっしゃいます。

全国からバスでいらっしゃる見学者の方に抱撲舎内や書斎を案内したり私もお話をさせていただいたりしています。先生の思いを少しでも伝えることができればとのご恩返しのつもりなのです。

先生の書斎の机には、先生の骨壷と第8部はタイトルのみの『橋のない川』が遺稿となった原稿用紙が、先生の生前のままの状態で置いてあります。皆さん、この原稿用紙に触れたり、カメラに納めたりと先生を偲ぶ風景が見られます。

先生が反戦と平等に関心を覚えられたのは8歳のころとか…。当時は日露戦争のころで反戦を思うだけでも非国民的な時代でした。その後、先生は満州（現中国東北部）事変、日中戦争、続く太平洋戦争を通して日本人の在り方をつぶさに体感、明治生まれの先生は大正、昭和、平成の4人の天皇の日本を見てこられ、まさしく近代日本の生きた歴史の証人でもあったのです。

先生は、特に、大地を耕し種子を蒔き育てるという百姓の生活を大切にされました。そこに働く人々を大切にされました。働く者が主役の小説を書かれてもいます。百姓の女たちに勇気を与え励まし続けてこられたのです。

ノーベル平和賞受賞のマザーテレサ女史との握手の写真がありますが、本当に嬉しそうな写真です。

昨年6月『民衆のフランス革命-農民が描く闘いの真実』が出版されました。犬田卯先生が翻訳されたのです。400字詰め原稿用紙で2000枚以上という大作です。牛久沼べりで百姓仕事をしながら勉学に励み世の矛盾、その仕組みに燃えたぎる正義の炎を。フランスの農民の大小さまざまの野火のような革命を日本の農民に知らせようとしたのです。目覚めさせようとしたのです。

卯先生は初期の日本農民文学会にかかわっていました。私も今、この文学会の編集委員をしています。なぜフランス語がと気になりましたら『アテネ・フランセ』というハイカラな名前の学校に行きつきました。多くの若者が学んだようです。

『橋のない川』第8部の余白は、私たちへの宿題。あらゆる差別への偏見をなくし、『橋のない川』に「橋を架け続けること」が永遠のテーマとなるよう。もうすぐ「野ばらの日」が来ます。6月16日の命日前後の第3日曜日にファンが自由に集って先生を偲んでいるのです。

在りし日の住井すゑ
ー牛久沼のほとりの書斎にてー